

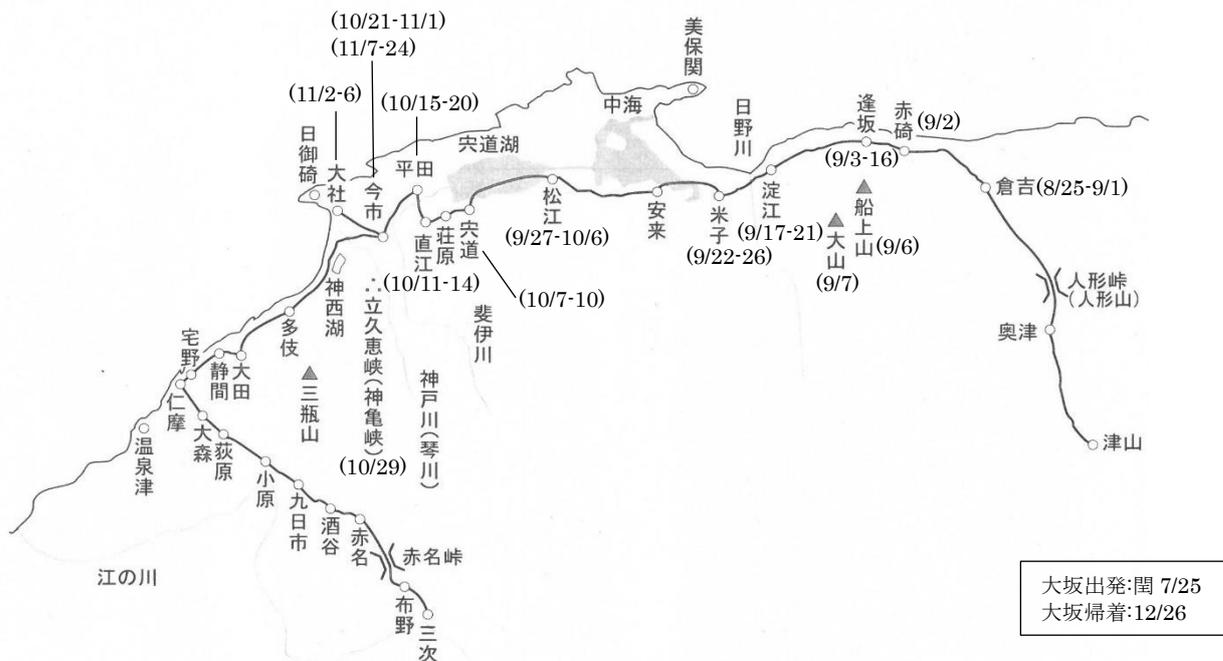
松江を訪れた文人

— 広瀬旭荘の漢詩 —

今から170年前の嘉永7年(1854)秋、一人の儒学者が山陰地方を旅しました。その人物は、当代きっての学者で漢詩人でもあった^{ひろせきよくそう}広瀬旭荘(1807—1863)です。広瀬旭荘は現在の大分県日田市で生まれ、旭荘の兄である^{たんそう}淡窓は日田で江戸時代の日本最大規模となる私塾「^{かんぎえん}咸宜園」を開いています。旭荘は兄の跡を継いで咸宜園を管理したのち、諸国を遊学し大坂で塾を開きました。

山陰を旅したのは大坂居住中、旭荘48才の時です。閏7月に大阪を旅立ち、津山から倉吉、^{おうさか}逢坂、大山、淀江、米子、安来を通過して、9月26日に松江城下に入ります。松江を出て、宍道、平田、今市、大社を歴訪し、12月に帰坂しました。この旅路では、地域の有力者や文人と交流して^{きごう}揮毫した書を各地に残しています。

今回のミニ展示では、旭荘の山陰紀行での地域の人々との交流、旅路で感銘を受けた情景がわかる漢詩を紹介します。本資料は松江市美保関町の旧家が所蔵していたもので、令和5年に松江市へご寄贈いただきました。寄贈後、初公開になります。



嘉永7年の広瀬旭荘の山陰紀行ルート (『百四十五年前のわが町わが村』掲載図に主要地の滞在期間を加筆)
 本解説は『調査コラム～資料調査の現場から「広瀬旭荘の漢詩と松江—嘉永7年山陰紀行と美保関三代家」(村角紀子著)』を参考にした

梅花零落雨蕭然
已得年記得碧雲湖上泊
寤歎枕五更天
旭莊

【意識】

梅の花が散り、雨が静かに降っている。

梅花零落雨蕭然
回憶西游已隔年
記得碧雲湖上泊
蓬窓歎枕五更天

旭莊「廣瀨謙印」 「梅墩」

西への旅を思い出せば既に昨年のこととなっている。
宍道湖畔に泊まったことをようやく記すことができる。
粗末な家（自宅）で枕をそばだてる夜明け前のひと時。

登高東望路悠々
旅愁莫道西限風土異
猶似浪華秋
旭莊

【意識】

高みに登り東を望めば、路ははるかに続いていく。

登高東望路悠々
賢主多情忘旅愁
莫道西限風土異
黄花猶似浪華秋
旭莊「廣瀨謙印」 「梅墩」

賢明な主人は情に厚く、旅愁を忘れさせてくれる。
西のふもとに道はなく、風土も異なっているというが、
黄花（菊）はやはり浪華の秋に似ている。

「春雨独座」と題した七言絶句。広瀬旭莊の詩集『梅墩詩鈔』に収載する。旭莊が大坂へ帰った安政二年（一八五四）正月に詠んだもの。
山陰を旅行中の十一月に起こった安政の大地震のため、旭莊は旅を短縮して帰坂する。自宅の片付けで落ち着いて旅を振り返ることができなかったのであるうか。梅花が散るところになり、「碧雲湖（宍道湖）」のそばに滞在したことを懐かしんだ漢詩である。

「重陽在橋井氏賦似従者」と題した七言絶句で、『梅墩詩鈔』に収載する。旭莊の山陰紀行中の九月三日から十六日まで、西伯郡逢坂村（現在の大山町）の大地主であり文人であった橋井富三郎氏の居宅に滞在する。滞在中の九月九日（重陽）に、主人である橋井氏への感謝と長く続くであろう旅路への感慨を重陽の節句に飾る菊を用いて詠んだ漢詩である。